

目をこらして (20)



帰りの時間に本を読みました。豚の出てくる話です。

あらすじは、こんなふうです。「あるところに象くらい大きい豚がいました。豚と飼い主はとても仲の良い友達でした。ある時、博覧会に出てほしいと頼まれて、豚と飼い主は町にやってきました。博覧会が終わり帰ろうとしたその時、博覧会の人たちが『豚を売つてほしい。すごい丸焼きを作つて町長さんたちのパーティーに出したいから』と言つたのです」。

この部分を読んだ時、紫組の子どもたちの目は驚きで丸くなりました。次のページを開くと、なんとそこには豚の丸焼きの絵があつたのです。

そ、そんなん！と思つたのは私も一緒でした。

でも大丈夫、その次のページでは、飼い主がとつても怒つて「丸焼きになんてさせるものか！この豚は、大事な友達なんだから！」と言い、そしてめでたく豚と飼い主は家に帰りいついつまでも幸せに暮らしたのでした。

この話を読み終え「びっくりしたね。丸焼きにしたいって言われた時」と私が言うと「そうだよね」「やだよね」





耳をすまひて

と子どもたちは日々に言いました。

その時「でも、ちょっと食べてみたい！エヘヘ」とショウタくんがつぶやきました。もう一度みんなの頭の中に大きな豚の丸焼きが浮かんだその時です。

「そりやだめだよ。それはさあ、おまえとユウマが友達で、そのユウマを丸焼きにしちゃうつてことなんだよ！」

というケイちゃんの真剣な一言が響きました。

*

私はそんな子どもたちの話を聞いていて、面白いなあ、すごいなあ、と感心していました。みんな自分の考えがあるんだね、大きくなつたんだね、と思つたのです。

かわいそうだけど豚の丸焼きつてちょっと食べてみたいよな！と言つたショウタくんも、例えにされて何だか変な感じがするなあという顔のユウマくんも、それからとても説得力のある意見をいつたケイちゃんも、みんなみんなないなあ、と思つたのです。

外は北風、でも心はポカポカと温かいのでした。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふじどう幼稚園）

